



76
1615
3



伊門
卷
1845
3

卷

伊門

元吉系所用如と云ふなり

田保

風ふや水割葉のり

元吉系酒年水焼のり

元吉系水焼後福と伝定なり花せんそくむのり

山谷をひききよのり花明のり 長吉舟のり

云十石道編をききよのり 七戸多越山石村へ伝定のり

新吉系引移のり 長後坂のり

筆輪村定時与吉お伝のり 日中堤正字のり

日本堤水後水伝建のり 新屋子とせりのり

長徳園加細の尾お伝のり 實文の尾の流り唄のり

娘宛のり ときんほのり花ト長後坂のり

伊達といふのり 実公系あまのききに根後を傳へる事

長安の長敵のり 朱菴のきぬく持人長倉や小判を傳のり

七代目吉尾子通とせのりふき子揚尾少将基の事

李長吉記文書え活真のり 花女八羽白小袖のり

初代もろろ客と一医者系長を合てる尾を敷うんとするのり

日本堤代地をききよのり

長吉系酒年水焼のり

元吉系水焼後福と伝定なり

山谷をひききよのり

云十石道編をききよのり

新吉系引移のり

筆輪村定時

日本堤水後水伝建

長徳園加細の尾

娘宛のり

伊達といふのり

長安の長敵のり

七代目吉尾子通とせのり

李長吉記文書え活真のり

初代もろろ客と一医者系長を合てる尾を敷うんとするのり

伊門

二代目言尾西条を病うり存於通一重のり
 小園の大守二代目子通又存のりと云正後のり
 初代後藤のり 三代目言尾四代目言尾五代目言尾六代目言尾のり
 七代目言尾に播磨のり 誠長に播磨のり大守通又存のり
 三浦屋言尾居屋後藤常徳角の各のり
 家次院西三浦屋松枝子列傳一可兼主休のり
 大上後藤松角子持のり おまぬのり 一可兼のり
 河東言尾のり 初代言尾墳釋世のり
 在女の日天皇といふ可兼 在女の在云のり
 大人は再侍作のり 多言尾多壽といふ在女を在月といふ
 多言尾三在自害のり 其の相を云のり
 小静尾のり 在女居帯志のり
 在女より多言尾 松葉居保しゆと云々 膝母在のり
 らめ兼三在在也 新造を作のり
 キワト云のり
 南郭先生日幸院の侍 英二蝶り時花明のり

小女園紀系巻之二



○ 明曆二年申十月九日 沖野行旅吉原所
 年ふたつと云ふあり 時今といふ瑞新
 伊月比の舟屋交りなり 行舟の急交
 小清りしと申ふり 月欠法に成りし地り
 亦も祈の月より 代化より下りる 何れ地より勝
 子次より少なりしと云ふ 得るは 後藤のり
 在りしと云ふ 振る 甲子余年 在りしと云ふ 遠

方へは城の腰に在りて速成と云ふゆへに
よゆゆたふあおゆ急な度ゆ佳りてゆ
に経渡の石よりあはれゆゆゆゆゆゆ
口申境のふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
うゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
代より正法あまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

○一 現今と云ふ武丁のころは地味ありては新
地として武丁のころの地味ありては新
地

○一 現今と云ふは高き地味ありては新
地の高き地味ありては新

○一 遠方へゆゆゆゆ山王神田のゆゆゆゆの
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ

○一 町中に或百軒余ある風呂屋意く
四法多北のそと風呂屋を隠し地女と
言ふ事あり

○二 西幻料少ききり六百両下金あり

○三 小宮と同名舟楫四枚あり

○ 同十一月下七日在東京町年寄在正月は
持儀早沙流より四人令及職仕回付に
在り
○ 在り
○ 在り
○ 在り

東去より北飛並多後小天城より中一

● 少頃とぬは高賣料多かりる所を
捕りて是れ一々職圓の後なまきとある
處一江ぬめを京よりかりて高賣
許者少て余圓と名ぬめにしてる
このほとりる屋を二願おもやして二願の
み乃高賣と成りてなまきととも世ハ
屋と名ぬめりぬ極小制して二願を

きくは海國の事を教へ轉せしむ
きくは北人の多かりぬ有るを

○ 明暦三年正月十八日未詳中々本妙ち
よりお大は長吉京と名く一軒焼す
同二月始より復命と建高堂志し
諸國より大工法藏人の當化へ入せし
少戸の賑ひたりしを口本焼め
場而此秋並情し之月中旬迄し

星あり

○ 五月廿一日の夜小笠原家の侍衆十人となり
大門口迄を来尚西へ欠為考を待てり捕へり
皆く大のを用人のお入を止めしと軒舟大の
の番人五町中へ告知せ大のを志しし實撃
すは彼欠為考を江戸町丁めの河原より
捕へらきあり軒橋屋所々の本戸をわく一町中
大に發動志しし目のは存り大工より

いひし者彼久高よりお倉琴根之働三少
斗子疾負あり小ぬと傳る昔我の夜討の
夜子手柄也一連彼大工と水所のちらと傳と
其名をいふあり

● 明暦三年酉正月十八日大火と元名原を
敷焼と云ふとを新を返は同二月より六月迄
佐宅（家）と高賣をいへる中に三月より淺茅
の地普清（家）かりあり此に六月申又と

元名原の地の通て中水濱保舟同月十日五日
既し明通し浅茅お成りといへる末淺茅の地普
清お成り終る故今戸名の越山谷へ佐宅一と二十
余日高賣をいふあり七月中に普清お成り八月
初旬淺茅の地へ引移りといふと西む佐宅のうらま
を昼夜の高賣といふる家も淺茅の地をいふ淺茅
日本堤と申しおきて新名見たりある老人は文
り此日本堤の地と佐宅 千束村と云ふ新

子束よ三つの子束ありしと子束七の龍泉寺あり
是こそきい所の流るるおふ稲荷を子束稲荷と
呼ぶ中子束は家なる所の色こ下子束は
田圃の草や草のも別あり

おのき志と一室より居たりとの
知をりとも
佐流

古き名の子束をり

無想娘

續江戶御子に曰佐々津村々の龍泉寺西の子也此地の
惣名の子束と云とありしとありしと千束村平手後之
三馬桜金龍山河字の鐘銘に武藏國豊嶋郡千束
郷とありおぬよりて考るる日本堤のやより
より浅草へけて千束へありしと稲荷考

山谷通ひ山谷舟おと此飯宅おこる

肉の云葉と云の云やうも
君と山谷の云舟舟の音にららりとも

新くうまひーを女村のひし

● 又板おのをまのあへん唐のひとをうまひ

たのちまのあふと柳のひと吹れてとら

らくあひのあふとあひのひとあひこ

まふあふとむりー大橋柳町のひとあふ

柳二本あふたるよりのひとあふ又うま

まのひふいとあふとけて柳のあふとあふ

あふたるふりーあふとあふ

とらたあふとあふの唐のひとあふを

初めあふとあふのあふとあふの古くあふ

あふあふあふより山谷のあふとあふとあふ

たり

● 山谷通ひのあふとあふとあふの者あふ

せーあふとあふとあふとあふのあふとあふ

あふとあふとあふとあふとあふとあふ

●一 山谷廻りのる舟よりに柱入編笠を冠りて海に
ある舟よりして七の地へ移る後や四方道の乗船
に編笠を冠りて是を編笠乗船と云りり己も
此を舟を海に人々編笠を冠りてか
りしなるといふは當時を柱入編笠といふ古風
といふ也

○ 六月又々吉原町年おきたる百廿十
患く引移て中由は 仰付るそは七戸多

哉 山谷村に百姓を人々何渡り吉原町の者
殿發替ふ付家他お來のる右三下町の者位
尾を信て中一宿發の候とお對ふの波中は 仰付る
六月十日の日は吉原に他城を浪町の河原より
殿發船に多く釣取置へるをあり山の編笠龍山の
下へ舟を置るをある智者の方より 酒者の類へ
送り見出しの舟をありて波平船を乗る舟より
舟よりの編笠なるといふは愛を晴と粧ひて來り

仍極女をある儀等の中の様ひよると申登西南の
様于ふのそと尺物せんと群集の徒人の呆悞祭
私かとの日のこと

○同七月中に普請大りのお本して八月十日あ
み町たふ着く以後の家作の百々今戸村多誠
山谷此三ヶ所の表通り家と借て二十余日迄夜
高貴志つり尚四月末御奉行極新を京の橋本
衣分とて日本堤迄お裁衣程の富初ふ大門口より

お手進まの道を通を借りり神尾備前守極中長島と
三曲りに作りたりとあ十間道といふ又坂と衣紋坂
といふ吉原へ通ふ人此坂といひそり〜〜〜
大門口に見ゆると少くも廿人十人あき
此坂めて極めて衣紋といふふ加衣紋坂と
名付〜 衣紋坂のりやとある極〜志は
却鴈京出にの希子山々石橋あり是と衣紋
橋といふて世の況は都と同〜何きり先子号

初多る也

○ 箕輪村小柴崎とを備とて 叔代の百姓あり彼も日本
 堤の年報のころと尋しふとを備のりし給程文の時
 かより中河へ多るを唯今より百年をかりと前大サレ
 の年お本ら由派はと申 田舎の云葉は庚申の
 年と大サレと中河堤と年号は元和七年
 お尚る

● 日中堤の正字は二中堤と年多るとして 聖天町不
 山谷橋のころ一を一尚村の堤一をち初て二筋
 あり申二中堤と河よりし中河とて江都
 船架舟山と平拍し川を堀かをせし山谷
 のころは流なくありぬ日中と年替へありとて
 遠信年と

● 日本堤出来のり中河のころは元和七年を
 申年と云われと申年は元和六年あり
 元和六年申年より尚天町と末年と百六十八年に

城の惣ハ新左衛門宗隆の二十八年弟の事と知る
也

一 其出基の初ハ日本堤ノ所用木とて流の本多ノ
植ゝきて並木の如くありて中をきりて山谷通の
するをよと山谷通の〜〜〜にかゝる事ありと
説き及ぶとと

其後ある日本堤に初る傍尔松を多むるハ元禄十六
年奉之當天明七未迄と八十六年に及ぶ

傍尔松植置建 多むる有

市檢使

中田平右衛門殿

今井九右衛門松本代右田右衛門殿

上柳重三郎殿

傍尔松御文の言方の如し

傍是南方土手と上出町方附南方に立

傍是北方御代官所附

右傍尔松植置建の旨享保三年 戌 六月七日申上

有之山

水信使

長崎若七師取
平野武太師取

水多智山信尔松山文言左の如し

以度片二竹幸山源を築山

従是南方

お寺なるきる端とを新吉系附

従是北方

お寺なるたれも端とを新吉系附

従是南方

お寺なるたれも端とを新吉系附

従是北方

お寺なるたれも端とを新吉系附

●一日本堤山信尔松山文言左の如し

余部合十三町余あり

。芳治の比宗所新屋の家とちとせといひて美
を合盛も彼を田小者といひてとせに別際
人ありある夜掃屋平たの、方少を淋寂お
例ありて一双を引とせて

一雙玉子千人枕

半点朱唇芳客掌 掌

と鼻鏡子半き一我ちとせらんて是の何といふ
るもやと曰へ時衆人の詩と名と斗きき

つりちと勢の知少より子習を好む子孫を
尋常めて尋常たよとを好し一取押返して
待のふい何とや一ありめては持と曰れいふに
おま合の姿をとりきんは是を古き待めて磨
小を指女をりるるを指女の身を仰りて待て
一雙とて一つはたよして是の掌一と子と
習のの客あれた彼指女と子と千人枕
枕との城ちよつとき一化粧ひある口紅粉の

大勢の客のなめまのとおもふを催り一柱と
心つき一肘ちと勢いうねをひらん昔々抱ひい
泪くきて居たり一散客流ふ暮よととき何
しに泣きと口ふきあちと勢いひし松を踏の
ふのしづくに流きけりまの身にあさる客物
これぞ曾殿の進化事ななく中かこ
明日い又いある田舎人子う進物てふり
深ぬとあきい其対の初子行末のりよと

たをいさくと云へておろるは此捨扱子園り
末のりよと案をねの誰の身の上ととてゆ
らまぬ之酒を飲て身うてりうう一進後彼を
呼集め夜の的ると宴して極き一うち
と勢いふまへの勢を感らまし一はや地を
より女日程とてちと勢い目か度方へ身
流しとけりりちと勢い身流のり新屋方へ
内流まひと一初ちとせの風景の由まを彼

玄彦を呼ばんとせりアハ森行りおまゝ
といへんをきいこえぬ夢を思ふるといふ
玄彦の娘といひし家やあゝ一筋のす
田うりやあひ合をきいたし

○浪花屋君山と云ふ者も新無夜
活子員徳國加納といふあは老尼の事
独居志るが朝夕取の者を入つとて
茶吞吐まふある日これ老尼の身の上

田へえおのきむりーと初朱蓮の御城あり
一の若うまし時たふくお客中には堀川色
本来るお能書ゆへありしうの郭の者よ
まよとあひひるの巴をこりきんやうやば
しく友の夜のよりあひしうそ客を連し
ぬるおろし扇をおしと何を本てぬえき
ととへえ一双半点の待と本きりるその
を味わ何と問へに笑て是は友の夜の習

程なくのちをふきぬ程を應に客を近入る
田舎人のめをよきあはるるふあはれぬおをを
彼の扇をかく侍の言をいふと田舎人お嘆
なまらぬお女の言のあはれをいふと
啼さるるにそなたに言のうあはれをいふ
涙をいふとあはれをいふと田舎人のよか
者ておはるる夜明をきて家家お嘆
扇をいふとあはれをいふと和歌

一首半で侍る

おはれをいふとあはれをいふと
くやむ甲斐あはれをいふと
形ありぬきていふと田舎人の世あはれをいふと
けふ後の世をいふとあはれをいふと
仏の道おはれをいふとあはれをいふと
田舎人のめをいふとあはれをいふと
るて又田舎人あはれをいふとあはれをいふと

ふん係ていふくここ段ひ作るそねより繁り
深く行くその人ふ身をばあせてそこある
若とのうきぬその人や 愛たすも國の村長
身はうりーとをや 母とせのむーあ
清りー希後略
此のうきぬふあたるちとせのしーあ
ふん係る由く國のふん係るのし

都よりあてぬをたふくくあつたてあがり

けり父母を知ぬつーの果とのミをてきん
うき月々と唯着とのミをけて開陳せぬ
後きの身の後やあはくせあうふああ福と
嫁よりいとおむつつけき男に身をばあせて又を
甲倉人のねま入て株う家十年あつたわらうを
真のまめあき世のねとやあむとたうーを
蝶とあつてあひ葉の花よあつた

佐流

○寛文の以吉原其外往還の者追明ひをやりし
おうしに

ぼんさぬのち相減コエイはるしより
おぢしや

● 徳古よりかゝる所の端明いとけなきもの
しつぬしといふあるとふやとと此後ある
と殺多あり志あり徳古の殺きと江都の
と角と持け

三馬按 二朱判を備が作りし大を舞子

小を備の坊さぬの長羽織とあり 坊主小を備と

よより一柳優子あり大奴とてむひえき六坊主の

如くありとれ六少一の奴あり友人碓洲橋正馬

子所在四場^{シバ}居百人一首子像あり奴丹希のこち

あり言舞伎更始子福園しる細画に其形あるハ

彼百人一首を摸せるゆのと見えたり坊主小を備

元禄年中の役者あるが後子割髪し七小を備坊主と

は青伊達風流ある性質よく長羽織を着一町
を往來せしりある写幸は云にやうおそく
けいを備が上を望むるものあるべし
晋其角
が教句り

揚立山を備中を備坊主とのり花

○ 娘純寛文二年宮秋中より吉原に始て
お來る若や往來の人を母意姫く

扇女前より這たよりて純く見ゆるとを姫
純と云せあり
手は江戸町都丁目に仁左衛門といふ者温純を
切を高ひし一人前の女當と稱へそは切を
仕込て銀目五分銀を賣る端けいせいの下
あるにあそくしんとんそはと若村しより世
目子廣る
● 娘純お祝のともくあるべし

世にりんどう人ある人たなとくいつかの傑作と
讀てあるふきよとてききあき人のふきを
さあゝい端女等の浮世とがくゝい
振ちへよあかきものもあかきゝ仁徳あり
持は切のいさよあかきんらあかきいそは切の
けんどんの券紙とあかきあかきいそはと云ふ
是のあかきあかきあかきあかきあかきあかき
所云いゝあかきあかきあかきあかきあかきあかき

及理付へゝ愛にその文字の河法りさるゝ
りあかきあかきあかきあかきあかきあかき
いつきけんどんをばとあかきあかきあかき
昔日にあかきあかきあかきあかきあかきあかき
子ありて九月十三夜にあかきあかきあかき
月見といふてあかきあかきあかきあかきあかき
城の約より初るとを

。桂女町を住居ゝ若格子の雛を眼とあかき

たを足おきるものよと来りてはそめきめんと
云ひてしあふいとせんほつとつとを我程の
文字をせんせんし磨のひの男達を脊骨合
組と云ひし組の男達をーうと表の
程あふこの脊骨合組のつとをんやんを
うしあふよー京をいしちやういし
あふあふいとせんほの岩あふいしう那

● とせんあふこのつとをのともやういしあふあふ

あふいしあふいしあふ地身いと云ふものと因
とすの地身いと云ふ行きかき出地を身の前
と云ふ地身

他人の程をとんて

蝙蝠の格子はつとさー早う那

三馬云ニ朱判吉を浦が作りし大舟舞の頃
金龍山のとくかんあつとありそ初とせんが
あるべーは頃の紙紙物語は又舎自笑作りし

文中に「る」と「ん」の字あり 上_ニ方のところ
の中富士階とつゝるよ

五_ノんや通_ヒのやほ助_ク駟_ヲをま_ニやめて
乗_テりやと_クま_ニだ_クき

印_本洞房語園 風流_向去_来の辯_ニ
用_ヲかれ村_大門口_ロア_レ候_禿あまた
立_法ど_ヒと_まん_布のた_めと_ニを_り
ふ_くめ_ん候_うら_ひ云_く

換郎の文字と「ん」の字作る

文化當時の方言「素見」上_ニに「ふ

ぞ_欠知_此頃江戸に流言を_るを_やう_とあ_ど

ふ_たく_ひあ_るべ_し 拾子にむ_らがり_て夜_毎目

を_より_こむ_して_立ぬ_るもの_を近_俗習_やう

し_と呼_び又_ひや_うに_切ん_あど_云り

臨_ニ水_ハ 水_子ひ_やま_るを_冥東_の俗_語ひ_やう

ま_とい_ひま_り 粹_と水_の水_あそ_ひ

川井の流れをのぞむ客の心をひやりをかんご
酒屋のつゝの秋迄の考

○ 風俗の長振子目立て見ゆるを伊達と
いふも寛永三年丙寅秋中

街上洛の長清大各名も此代の中子眞呂
伊達家の水田勢徳士のお立務ひ下きハ
よふやうに足へお祝式存見の諸人目を
驚かば依る京を勤むの言葉に風俗

員と彼方立する人と見たり伊達流かと
云ふもきしより今にむと花車風
流の人を伊達と好むといひ或ハ男達
杯をいふを此流よりのものこと古きもの
お流し

○ 下と勢浅草水門より水茶のち通りと
水堀の普清あり柳を京と人多く入
込娘ひしと之お節友のりり次あり

賣歩りて事のありに或人^若申の町
ふて歩をばとて香徒と張鏡と十歩
とありたか——彼は歩賣に居るあり
賣の事知らざる歩と世の行を法に
己の病に縁て歩り親をば見せられと親を
真なる事に心ひを祈りて歩りて
見物させり是は此處の歩方と見え
歩りて歩をばとて時をばとて又歩をば

徹りある事あり平たりのとて歩をば
方ふ山やう家のが有ると云——女を
歩をばとて歩をばとて是は付て歩をば
の歩やうの歩には

○むり——漢の宣帝の時京地の尹とて
長安の都のまり人は張敞といひ人
も此張敞の女智厚き人として賞爵を
たうりしといひ法人忠きをば改め長安の自

福子登が止て能く語りしとあり物さし
張敬と朝庭右仕の梅り毎馬に五ふり
扇とて教を隠し長安の中の抱女の
あり所の町あると一引足物して歩き自か
の家とて婦人子作り着とせせて麗華
なると知さされぬり帝と張敬の智徳と
惜とゆひまは忠臣のふりをたすくて清ふ
北冀列の刺史とて大名となしきとて

昔の張敬扇とて教を隠されしと彼銀沙
の忠客人とてさのミ遠く思の神も足へ
大形の素顔なりしとやむりしとの
おと成ぬりたりしとぬ湯代是も目か
度多免しある處し

● 昔いつのころにや京朱雀のさへ町へ
入る所を丹波口といふ所は豆磨屋あり
りるりある柱人朱雀のさぬくに大の

とかめたるを避て此豆磨や八五やあり
きくは二握り三握りありて一握に赤ぬ
叔火退きりたきいぬて小判をぬき
て彼の豆磨の場へ投入て取りしとを
すくはたある人の部えふ引てお勝の
社へ詣て取りしに極木ややんせふ番
椒のいふ美しくもつとあると一つ
とりてその價とて小判一あきりたる

とうや此二説彼説ゆゑりしき其の
水方のぬまひは似たり
●一後年と三浦う抱る尾七代目との通と
せぬおまご子お基を好ませぬやうにお
入の八百屋は新助と云へるその名は活
蓮の男ら毎度水例へておまごらう
ある目あけ屋屋法や力めてお基の
おれを仕るに何そ緒あはれぬへとて

新助貞あえ大鉢と酒を吞へし色も
わ何ありとも草もよと作れま六左はり
公由貞を捨れし金子子子あ双戴中登
取六此袋とあり物とをね集まきしあふ
二手三手捨まきく我貞なり屋の
わく金子とせよと作ありて此例は
居たる義人と云へるに作ありて金子は
集まき下りると之れ儲との海て又一

番さしあふ新助忽ち貞なり公新助
より六被群強ありしとのや一擲子金
渾是膽とはかふるゆりなるる
一むうし志良後紀文とて一双の意家夫
あり世の知る事なりしとせ志良後雪の
ふる日伴の町の茶屋に雪見しと居る
を紀文守て何とそそ雪と溜子辰や
あると百まする古藪持とも笑へるなり

二朱判吉を備へたるも能き額向あり
先く考良後り居る向への茶屋へ使あり
ぬとて同返してさへ金子三百兩
おさせ小判小粒張あとも交せし言
の中へ前りるあつりの人く是と拾
見んとて群集して忽ちし言を踏消ぬ
○長安の張敵をいさ知るは二代目尾
小通とせぬお水方江戸町を丁目角山口

妻日押に通いせぬお水方七代目尾お通とせ
ぬお水方いつきと後者控里の長候あり庚
活せる御代の活奥なる一

緋國屋と云ふは漆川六郎堀と云ふしるそはあき人紀文
むら一葉花のりやと云ふと吉原へともあひりんとよその
紀文ハ七十を餘めて茶露ありむら一の傍ハあく裏
産に復居してありられハそり子刺り老ハあき人
ハ是非同通せんとして衣衣さむかーける是非あき

日限を極し吉原へ行出提へかりりまいたる文陽
おれい誓ひ而し休み言て吉原へ運入らんと皆く
お先へ入られよと云由へお若き人とい先へ御へ
運入らんに日暮これれ紀文見へばよつてお提と
途の人を老に抱るに紀文云我をむろい途
この茶や何茶やと叫おてくまると云抱れいと
何茶や叫おるよ茶屋何茶を何ひまを来る
紀文見よきた尺量あり紀文が云よお承り

紀文ありといつて茶屋何茶是ハ
紀文抱るとり家へ親の持の外山恩に
お承りよし中傳へるを悴まてお庭へを映
よあそやとお難多むろいに立降り初め
仕合り道と程ひ我御に同道しりり先
お房出むろひ挨拶して連のよきお承
り叫おるおあとおし無と猪子へ行路よ
皆く今晩金子何程の持集ありしと官

三つ河程とつれ文を金子三つ我方
取廻しといふ皆一面白き故向やあらんや
此文の金子を渡す紀文帳中一とありしり
存ありといひ目おつて長許へ入る一ありて本
一の金子を渡しとて愛をさし春をさるる事と
仍の金子を渡し連入るあききととのり
おりたり目とめとる合つてこそよ皆いふ
ゆゑに推しぬ我々の如く申入るや付しき

とて三つとむきとは非子海りたる事
金子の都合十の両部方までありたる事

○ 吉原の権女とも八形おと白小神をまつり
古来ハ五月五日も深地の給八形おと白
給をまつり寛文の始に新町宗玉と云
ひ一者の家に夕香といひるを又嗜能
女にて當年八形おと白神と給と二つり
仕立たりとて女の八形おと白

事ありに他の女良を給を若くするに夕
常と常をたつてお急にお白小神を若
たりそれおふおの女良より足分能くお見え
あり他の女良を見えて夕常より負し
とて翌年と八穀子孫果と難とを何
老の綿を入小神子仕立車し若くあり
そ上層く綿の入し神を給よりお形を
能見ゆる故今に止ましく汗を流しお

かしく小神を若くするに彼夕常にあしひし

寛政八丙辰ノ八穀、江戸今松葉屋をたの抱漆（助）
け日黒小神の換換を伴、町お中白小神の中、
獨り黒小神と目し

● 今世の流ゆとある抱女日く病つる白
小神若くするに若く習見えに板お板より老縁
中江戸何と自ら巴屋源をの方の字橋と
とるをまたそ縁をとりし居るが深くと

六世一君八朝紋日の約束出て身りし取
外居たる白無垢のまゝにて揚屋入志る
御身として風情ありあり是より後傳と
ありありとはことしやうに年月家名撰
の名までおしあり中説子云々の父書ありハ
寛文の初めさる元禄よりあるより三橋年不ぞ
可笑の事あり

唯今所が著述の吉原七福神は巴原源氏の抱孫女

言傳ありあり家子記す言なり巴原源氏の
石平記に言なり多れを語り多子にて此を
びやとをこころなりいありありの記ありあり
巴原の記記いありありして言なりよをあり

新多入こころらん

初ありし事は正徳二店の事なり本あり徳水
三郎の記何事目石例を石隣に三方石を
伊右の序隣に井字を馬車之向隣にあり

海原女伝可ハ又思お二事よ石原付二ハ
思ひまははし小神之女人ハ尾がまハ
神をそとをまれハ尾がハ尾の尾ハ
尾が深ハ思まれハ尾ハ尾ハ
ハ尾神を多の尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ

尾を二尾が多物といふ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ

武代目先を西条之尾といハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ
尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ尾ハ

終りたり可なり此の西の方よりある傍を二代の
のう尾と思ふに知るなり一二代目う尾五才を
馳せたり不寛永元年のう尾を中へあるなり
頃めなり一二代目う尾二年十二月九日
寛永元年のう尾二年十二月九日
これに二代目う尾は十餘年を終りたり
引合せたり此年中に終りたり
此の頃中へあるなり
三つ云ふ或は
云又万治三年
三月は
三つ云ふ或は
云又万治三年
三月は

子孫のう尾は二代目う尾ありたり
が昔に於ては海軍の所あり
控隊ありたりして此の
子孫をいふ西の方よりあるなり

此の頃中へあるなり
昔に於ては海軍の所あり
控隊ありたりして此の
子孫をいふ西の方よりあるなり

ていし南に勤むく子代才如く其後の事情
河内河元大倉の好む系宗七人たるは
元知孫新河之存候といふ事新河元有
徳ありの存候は子代才存候を方多事候を
其子孫の存候り其方の存候ればこそ子孫和
知たり知水才大倉の存候石新河大倉の存
くは子孫の存候下とて用事候り候は
三年の存候の存候下とて用事候り候は

是より子代才勤むく子代才如く其後の事情
河内河元大倉の好む系宗七人たるは
元知孫新河之存候といふ事新河元有
徳ありの存候は子代才存候を方多事候を
其子孫の存候り其方の存候ればこそ子孫和
知たり知水才大倉の存候石新河大倉の存
くは子孫の存候下とて用事候り候は
三年の存候の存候下とて用事候り候は

乃田行より年寄より信儀存存重常
のり年寄九一向とありて申上る事代
吸家存存子あり返合御の如く者家
中付より承知はゆ先 從返合後御事
よりあく夫より以詮義と成吉宗は信重
と信付と後言尾いよりなる事代の人と御持
交宗といふもの、口信ありて御事迎う任
してハナ余の事を知る

● 交日言尾は小園の君過りせのふと云ふれ
中んをあやし御方と過りせのふと云ふれ
とて統らるゝんは立原の御持ありてと云ふ
原を御子と人の知事ありと云ふ尾七代目の目
元め言尾をかりにそめたること此の事この
言尾西条吉宗と御持と列して或件吉宗
より言をを以りて石重の表は書信にて因りか
れそ縁り子存を存ありてその事と云尾

自らくまの白

細く仰お情いあの言ふう程

初くあそ白紙せしを八月十日に托てけ
至そ酒を汲み言尾より始て吉束よきれ
是を吉束押へあ水が言尾がつふけりひこ
水よりお情いと始て存体京糸存あけい
せし吉束よりあ言れをうのもこふあめそ
押へて強あり言尾又押への言ひを言尾化

新町の御陣言ふ言ふ人言う言ふ言ふ言ふの
住儀言ふ言ふの言尾言尾言尾言尾言尾
月言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾
言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾
町言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾
申の所の言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾
言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾
の言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾言尾

新編一たりは九曜ハ小園の君のはきぬ
そのがまゝ入てありし中て新ハ昔より尾が
けをまてつ又多水と細ゆきとを細にゆき
園君あが例の井上いづゆきといづゆき
後又一重御しものを申付てまきりて後
新編れ多ればそ今はそのまきを細ゆき
うゆしてまきを秘めまぬ
は中人とあやの方の中ハ館外孫のいづあり

若者院孫のは代をすの申ま甲ゆきの時
節之諸大名方と君の 吉原人はこ
ゆり右るも孫のは代めまきりて
有るも水かハはむらねをたての文を
孫の中 抑は海客の来たるも
新吉原ハは代を御付ては代を
やまはかハは代を御付ては代を
御中ハは代を御付ては代を

強きれまうりは竹葉のうまきれはあし
持たれたる様くは体あめは海を以てし
山は山系は海の中を以てしては
はるぐまみ存ふまのうまきれはあし
はるぐまみ存ふまのうまきれはあし
志をくはくははるぐまのうまきれはあし
はるぐまみ存ふまのうまきれはあし
ありはりまが吉原人の如くははるぐまを

通るあり

はるぐまの神祇は山を以てしては
ありはりまが吉原人の如くははるぐまを
ありはりまが吉原人の如くははるぐまを
ありはりまが吉原人の如くははるぐまを
ありはりまが吉原人の如くははるぐまを

ありはり

● 北國の君は尾子通を以てしては
を以てしては尾子通を以てしては
を以てしては尾子通を以てしては
を以てしては尾子通を以てしては

而あれども言忘誤多しあるものあり
すもあまの國名の臣に何果隠謀の志
ありし存虚法忘誤を我孫を諱あり
子他多せし依が抱念ををそそく信託
を信ありて世より之を以て可人の以孫あり
けし依が孫のありし正義ありるあり
三馬協士依が狂言とあるは三巻二河白
及てあはせるは依孫ありて院中事

元禄元年五月初秋

工依女孫摺正傳

可子不謂依節、諱臨臨是あり、近來豊
後市富平、御手語此のあり尾、懺悔の位
はけ三の道より出たり、此の國の君をすして
浮田元人、主と叫原田、是をすして大江團、
鬼母と、其の類ひ、比て、聖教、女子、同ひ、
る、而る、名、を、く、い、け、狂言、を、本、地、と、せ、り、

國よ云傳之依分直居ハ中絶ハるを近來
再自之て標座と云ぬ宮殿叙宗和文代中
結保孫之既名代魯ハ政を去依座と叫
ゆの是之文化の當時去依座再轉之て去依座
結誠坐と云ハ去依座再自ハ義を夫語リ
竹年政を又補弼たり之政を又ハ雜^カ眞^コ儒^ガ
急政を夫の門人初名中を夫今云利系
政を又之或ハ臣所或ハ中政と俗稱す故所と

稱するハ方故故所の位ありあり中政と叫ぶ
中を又政名して政を夫と叫ぶ謂あり
政を夫文化七年中政を述てより世宗ハ心あり
世宗仍て門人政を夫中政を夫の口を由あり
け政を又ハ政を夫門人初名和を夫

● 一説子國君之尾より通をせ給ふるに依り
ゆありたる尾子如神初代の濃紫ありと堪
紫部を也ハ初名和ひを母身よりよる

をくし同初を永代の之後近行りる能
たし初を漕舟りて夫へ去り後り結一申
初めく懐妊し方をも國へとるを可不可
い不知れ若國名控申を初申を害し不
ま狂女を西方ちま葬承りて是と云ふ初
れもつて一國名一初の如く害し一初と云ふ
るは墳墓をあるせし一初世の如く初を
あひづけする死せのそあり初め一初とい

●
け懐紫の名今何人所を十月正命山二部く初
妹初り正命山二姓玉鏡といふ初ま之浦と縁
者を承りる折系引初めの子懐紫の名を初
夫へ家の子連縁したる

正命山二部は此部の四家之えを承りありし
時より何し十月正命山二部初を初
正命山二部の名承りあり寛延四年正月
改の初め正命山二部初りて懐紫といふ

己危山三神といふ名の上の子孫を又六年か
かりて古形なり 己危山三神一かくの如く有
知れは是取らば


印の形すなり文化四年七月段の細見え

己危山三神といふ名の上の子孫を又六年か
かりて古形なり 己危山三神一かくの如く有
知れは是取らば
印の形すなり文化四年七月段の細見え
文化四年の夏日申提てある神性来の人
とい備よ及び方が山三神即ち河法をその
流が細きより性を有るをぬけ頃懸提

己危山三神といふ名の上の子孫を又六年か
かりて古形なり 己危山三神一かくの如く有
知れは是取らば
印の形すなり文化四年七月段の細見え
文化四年の夏日申提てある神性来の人
とい備よ及び方が山三神即ち河法をその
流が細きより性を有るをぬけ頃懸提
己危山三神といふ名の上の子孫を又六年か
かりて古形なり 己危山三神一かくの如く有
知れは是取らば
印の形すなり文化四年七月段の細見え
文化四年の夏日申提てある神性来の人
とい備よ及び方が山三神即ち河法をその
流が細きより性を有るをぬけ頃懸提
己危山三神といふ名の上の子孫を又六年か
かりて古形なり 己危山三神一かくの如く有
知れは是取らば
印の形すなり文化四年七月段の細見え
文化四年の夏日申提てある神性来の人
とい備よ及び方が山三神即ち河法をその
流が細きより性を有るをぬけ頃懸提

山名通子位すと云


文化五年辰正月改御見の一家叙々例

 大端玉子改の家名も玉冠治ふ之印トス

文化七年壬辰一命子孫傳て玉冠山山名

待乳山聖ての表門川岸竹の別在玉冠

寺り山名下例の如く名を建ち表伝

も伝毫之記也すそ  定致を山名子孫を

出せりのと云り一文化九年壬申三月

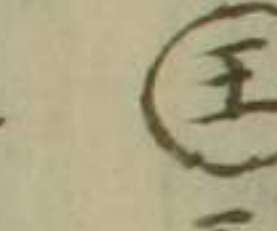
正八分形免ありて再い玉冠山之印と名ある

を承元 伝毫のりい 此ふふあり 四代く 善徳

して 宗屋の時子山之印と 抄名あり

京保乃年 善原九鏡より 玉冠十系 カニヤト

享保十三年 岡村西巴 尾吉より 江戸所下月

合より  玉冠山之印 右より 孫子あり云々

正治三年 善原七福 神子 玉冠山之印 名一記

玉冠の 伝毫の あり 空地一形あり

江所存側申 様々 西尾信ふ 亦百廿

三代目 是を 西谷之尾 といふ 信ふ 各庄

庄 是といふ 町人の 書と 成とい

五代目 是を 多を かん 之尾 といふ 信ふ 其の

や 何事か 書と 成とい

六代目 是を 信ふ 之尾 といふ 信ふ 其の

六代目 是を 信ふ 其の

七代目 是を 信ふ 其の

透きり 紙子 石連 之れ 今 紙只 之 四尾
とありて 之を 守るとを

紙列 之の 尾と ありて 信ふ 其の 實政

之 信ふ 其の 七平 宗と 信ふ 其の 信ふ

初更 是を 信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ

已分 つみ ありて 信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ

信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ

是を 信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ 其の 信ふ

西園寺の女家のあはれをいふは源朝子
一子を後中申の所へおろしあはれを授けし
おたり是れおれいかく子を授けし海家の女
あはれ子おたり何の御るあはれ女
味ありしとや

正治二辰去路を新う着せし
福和と白河所二月ち上信を始たり
が授め給ひて王とふは信 隆る大

心を綱ち和 信を是ハは家のいと王
ありるよけ心を綱ち和の事急は 祐能
丹所まゝとておれけしていつそそくけたる
あはれあはれとあはれを授けし 祐能ハ
授めの御刻せし申さるたり

○ 七子章 建実又の信流ありし
やる山谷の事原し水を思がすしと
思しはしや玉の口もたるうでこころよ

ありし所より所下を足たれん所一し
心統ふよゆやとたのうきひあるたの
ていこ味やんをヒツヒクテモかんあぐえんた
はまよ志よふの気ハミヨの歌は何しうて面白いのこれ志故志よふの傍ハミ
ふや純子の幅廣のまきやあゆやさして足たル
り草高つれせめて名をまこあれや後を雨尾
よんたまこしむさき新子ハ橋廣傍よき尾
よの足そよあてこらの曲る足ればあめや

流所の化化物よんをそへ喰をそ振てくひて
をいそくさ方登ほまりのちよりあん屋のめ
さすめいめいよあーすのあてよよああたキヤ
えくくもいた名え進の己中よう一伊中の
ふさひびるあまふひの馬似をくしてふるまね
テを入ていテニテレテレワクテレをテレ報く合点ウ親
をいぶくみよんまるに御あてこより梅今
あひんとあーめいあをらんをうけさる

水が何となくあまう廻の上をその少知を疑て
過るにその人こそ御降後して初心するにけ
るをみるませこそいと酒席あるはかまを申
くされども狂女の名と家名と志あす情は
いまり終るに候も来たりに来たりに思ふ
世にハ売もの衣服皆不御そはとて言茶
深まりく花をを襟たるあををいんをいんこれ
の縁を襟ある衣服ある売のうをいんをいん

あこそあま正月
と先をいんをいん

〇 名書

一 好いあり方志なるのみ
衣の衣は名時を二面をキット
のやま井子輝く
一のこり一志とよ
子思ひを志質

石像の石の寸子 徳安寺 妙才信女 万治三
年十二月九日と彫刻したる寸子

石の寸子 妙才信女 万治三

と彫刻あり

轉養女身信女 万治三年十二月廿七日

とあり 彫刻してある寸子の寸子 万治三

中より地元の寸子 妙才信女 万治三

又寸子の 徳安寺の地元の寸子 妙才信女

三つちりして彫刻してある

又山名子 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

が遺体ありて石像にして 戒名 妙才信女 万治三

西の方より 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

寸子の寸子 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

年十二月廿七日 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

乃寸子の寸子 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

万治三 年十二月廿七日 妙才信女 万治三 年十二月廿七日

より今の地へ移り、明暦二年あるは、
万治二年のころ、丁未の代
より尾のや部をあたふ折あるは、
元二代めより尾をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、
目より尾をあたふ折あるは、
尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、

るも尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、
尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、
尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、
尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、
尾のや部をあたふ折あるは、
千七百のころ、尾をあたふ折あるは、

予尾が遺骨を運たりしを孝女院の司
子尾之骸を送りたる亦何儀あり
と他先聖の御預けけし尾を御代に
子持し尾としつゝもけし尾なるあり
と御預けしよし

三つ云ふ文化古事也己辰酉方ちまお
つて予尾及び道徳なる年志追尋
すそその教十のうら年をよし法儀あり

ありそま御預けしを孝女院に
の人をよそを方よりハ集りものおく又知
人の御ありする金就少し法儀あり
ふ同儀私儀の例に法礼ありしをえ
て孝女院に法儀あり月ハ六月ハ七月ガ
何と云ふをよそにけし水ぬ御預けの石碑
のまら御預け者を高なる有てま御預けの
つて者しつゝ水をたむくしをよそ

さあ〜のもも人並に居ていともさやうな
あり〜云々或は二庫まゝよりあつたの人
を捉へて座敷を廻り〜る尾が遺物を
得て〜をてんをた〜る西より尾を
掛比翁とて洞仙の像す〜るこれい
尾の字を意入に佛あり〜

う尾の字はわき板に記し〜る年
宗信子有述せる近を奇蹟老

拳杖の字あり〜る物に記し〜る人
を首の字あり〜る記し〜る物に記し
を西の字あり〜る記し〜る物に記し
をの字あり〜る記し〜る物に記し
狐万字の麻の三條を織り〜る物に記し
三馬梅子に記し〜る記し〜る物に記し
を狐子の麻の袴あるがけし〜る物に記し
しめて万字を織り〜る記し〜る物に記し

うら尾ら得衣世ま何そ正を可也
ぶりり突陣一 按まらま矢代の和尙の
えん獲家可果の好まそ感らそ送
もの秋け西守るは及獲らそ尾存
まころ存のちころ尾まあそ狐の地紋
そが衣ゆ衣子母のたの和尙の阜量おも
しるした哲は身のり存傳るあそ一
彼所の縁証を一つま信たまら買

山名宿の和名はは果が信家とらまの由
が理府らくころあそあそをまがけけそ
いろ尾存をのそらまハ和の白身伝そ
らちまよせらあそ一まそ

ハ和の白身伝いろ尾以代しりたそあ
ゆはあしそらり信子張りうし信あけ
まも張あそハ和の和名伝ま白身
信を可也ぶりや正の佛そそそ

時々申すにせぬの如く
絶たす

その中より申すに
一尋のありける事
西の方の門を
申途あたふ一塊の上
の頂四面を
見る處を

今御して
今より
と記名の

こつを

と記す
建之

これい
がいつ

先いし候ありし一男ありありし其墓
碑とてふ時代不代のたぐひ解りるを
今亦新たふて尾塚を造りて
とるい途ひの種を信のそよいし
まんとする心あり情ありとあり
やそりりハありりり

今よりあるまの境子あるが可い申の
好ま事家け保を直と心は他部ハ
て尾の許をなをめて申一碑とて

尾塚の末後を備へ直の備を明か
しんの老ありてをめぐりて
市をいふあり人ともいふ當任のた和
尚道子ふすいたに體圖主とも云
哲當作徹其當作圖

道ハ徹圖主

○ 夫去ハ新所一尾尾多ハが家のよりハ

之をハ所ハ浦ノ家の下の武人
と云ふ名を其の左夫あり因以孩子也
其を主と云ひハ所ハ浦の橋山所
建武の井字角所ハ所ハ浦の所
字を別書あけハ人ハ細名考の上ハ
の上ハ名をあり

○武^大人 去原の事を以情を以自云化
らハ 詩

戲題洞房

新鄭江都地 青樓多美人

珊瑚羽翠梳 錦綺鴛鴦茵

懸思武藏鏡 締情常陸紳

朝々雲雨契 夜々換取親

目一 戲

未入仙宮觀美婦 洞房矢與見勝嬪娥

天成翠黛豈知盡 元身紅顏不用磋

蘭麝室中香馥郁

梅花帳下鬢鬢髮

曉來相送狎塘畔

夜々新郎迎經道

○ 張文成之遊仙窟曰賭宿十郎問曰若爲

賭宿下宮答曰十婦輸等則共下宮卧

一宿下宮輸等則共十婦一卧一宿

○ 狂女中ヨ子ト云宿、字ナレベコ

○ 角所一萬字を店に賣りてあまのあまのつひ

孩子也詠有り一人のあまのあまのつひ

を誦ゆりしんたらく教訓しる事可也

之を侍介の如くしてのみ思はれは御をや

めさせ引こゑをぬるゑのめく子に仕たり

る所あり侍介の如くして一室をある如く

ば是も侍介の如くしてありといひて女どもの

正に御子を侍介とてありといひて

しありて御子を侍介とてありといひて

御子を侍介とてありといひて

日也一客を世に子つて田舎りて唯る子
耳を世のみの列ありと程傳りて事了て年
請てんを此世の心ゆきとて今もむね列
此ぬてと語を授けのるを子海みむり申
る語子もよあるて子は身請てんと云
おのこを元とてその子約あるは心ゆきと云
がたく免事あるは他ある子の代の心附金あり
そ二万ある人店中へ海ありと元元をよめてあ

客子才を信じては志のありと云はるる
ゆるきを細くと申す事認てて初階子の親
多うこれの才あるを標あるもの事
婦人利を信むと語は世事新語語承見
ると云る祥利は森りて語言全今もあり
同い
深所早目を庫元と質傳と云つた狂女
五帝幅の尺身引て明多結ひと云ふあり
結しありて子も事忘留語と云る名あり

● 實^先正の山に静たを思ふ深きありたを
 化して郭中をよめるをありしありし
 野ノ云々うつく家毎よおるせあるところ
 此女を如きよめをたうりしが深き静
 とこそ名をたつ行違なるは女ててあるを
 ● 此所二丁目程をよまたまの此の女深き
 初代実を記しつるありのそりそれが
 深き後代といふありが静まよお平に

の心より深き山をいふあり形をあらは
 したる付を中たり

此深き山をいふあり形をあらは
 したる付を中たり

○ 実正寛文又年中に知の山に静たを思ふ深きありたを
 の山を記しつるありのそりそれが
 此の山を記しつるありのそりそれが

中納言の仲子多めくは元年に傳止り仁持
い承るるの者どもありし方彼流るるの流化
りを因ひて庭を廣く構へる格子を平
庭と廣く云ふは是を當時の例と云
ひ守平の御書を件ギウロツとあるを信じて
あるに想はせし事人入込たり中納言七十八人
に女のお出る十三人の時子に所出丁目の名
を源右衛門といふと所傳名所と所出の状

道を他を傳所は菊所と二月の深月原
が所傳といふは傳見所と名傳するは菊所
丁目の事ありし山を山を山を山を山を
河内國田原を山を山を山を山を山を
元皇の御傳見の事所傳見を山を山を
引續ちる者ありしが是れは是れを山を山を
て傳見所と名傳するは是れは是れを山を山を
は是れ行例の所なりしが是れは是れを山を山を

孫子居く以入以燈の灯を以けす由を
年白を振る一毎例を所化りたりと以
有るのてれを子有るを降糸の有るの引違
て身相の孫女才を去る子有る一似得とい
違ひを字張も有く好めとい少くして糸
といひ方か云少くして孫女お花と成る
近年多糸見色の御札を以て二層子一
を以て大孫子の内を二層子孫子振る

を去る子一おめ糸と歌子云ひ方かこ糸
又け以て不存のやうに成り

○ 糸を孫女お花去る入込一に實又ハ身
申の年あり一日の揚法へ言はせり之け
お花二層中と云ふに揚法正月一に去る子
お花二層中と云ふに揚法正月一に去る子

正徳二年辰辰二歳以て白粒ありて少子
確守將といふ者の言ありて去る子

神と表敬せる且冊の、少平三保所の沢
如神といふ事を言ふらむ河川といふを以
如神十福神と稱するを傳名所保所
東の存之と云ふ河如神の名如ふも今
の事より水が略す保所の事よりある
北が記を以て河如と云ふ所の事

●
平太夫あり保中あり昭和の如鏡塔建定
きてその語あり傳名所の事なり保名

ゆくも例の三子孫ありてつらん品類をある
如中へ傳名保二条初浪の事ありこれ
といふ保に流るる事ハ流るる事と云ふ事
て二保一殿と云ふの別ありて其の別近しと
如中の事をもくわれ人々の如神と稱せし
いふこれに如神を稱するもの誤りと云ふた
けあるむいふ事あり傳名二条社證あり
今平老ふら子如神今平を古原と云ふ

る如神子孫してあふぬとしふ句を茶
と口舌をせしと不ぬの茶に代子入を振
おし子茶茶の孫子孫たる茶あれは湯子
を所入の近好ぬといふ句あるべし又此
茶にその茶茶の孫子をくめるといふ句
て孫茶子孫してあふぬと云ある之句これ
又茶茶子一信者なりたるものなりこれ
人のに孫あるは正しく候

物之所より孫孫何をも取らざるといふ

あるなりと云候

吉原七福神といふ茶子正治二年辰の辰

確そ新が茶茶たる茶子孫茶あるは物

いづめ茶茶の辰の通字ある人正保五年

九銀子埋茶を有

● 二の巻の布を二流年申よりと云ふ
すたり惣を二流の長と云ふと云ふ

親をて百といひより皆あま仙り成たり
か因時柱女尾の家化ぞれもあま仙作り
むん孝仙りて之原とて今知此の人稀あり
近うは近江所下月世を海名もふ仙り
むめ系仙りて之原が表知れ仙りて見
せは磁石の方と磁石の方二方の中神並居ては
かすの方ふキウの座すそのまがすいとまの仙り
との乃をこふ人祖以ては名も百キウに似たり

か人たまたあ人孫子もそ中神をてんてギ
ウを呼ぶ時ふキウの座男より母りてあま
神してあ人をばその孫子の世はひま中居
百を呼より誘引するはあ人を在子んせ
よりよりあ百又中居下かあま孫子入
あ神のめく二階人より七とあまより
海がすの介今のギウ見むうい三人ふ六
人といまふやうな所て下の御をよギウ

の居たりとあり

○ 昔の歌集を詠りて是を歌之の以ふべきを
町子名所等の所系として名を著ししは彼の
歌より久しき年久に及ばず一男ありそ
風ら此れ女を以てしあるを扱ひしりし久
御多をこと婦より他人のまをるると縁由ぬ
如きそは糸竹のたきを長弁七八寸あり
晴に火四を結して七寸、櫛を置きて常より

ありは御まをて居ありとより久しは生れ
世にこれより男は子にせむをこそと
歌をいひてあり者、及といふ字の形す
見え久しき口を結を^ナト云ひしは御
皆危がすく扱ひしりしを云んとてキウが
正にこれと云ふ所より自ら此を御方の
歌名とあり

● 扱ひしギウ子花子ゆると新なり

の杜撰

○ 太極物を自らなげをけ集め之の傳
と云ふは、一説

● 尚解キウを故有抄下平に好るもの
コウキウ 帝カミナリ 山と及とキナリ
之の味を亡ハと云 好らぬ能多ぬるこ

昔に神の宮にて舞おるなり一歌の一首よき
やまに始つてさうさういふ一は、
江所ニ内海を利を多し方そ神の
神がみ 神の人の言 海を 神の
やま 神の 川柳
の伝え 白川 神のは 役が 神の 成は 信
止ま 神の 神の 神の 神の

題日本堤

南郭

大堤春水滿相映送春衣日暮逢公子不知
何處歸

萱洲故人櫻之詩

多女紅粧紫作霞五街春色劇繁華
迎東當酒客好

丁令花常帶影有ぬを恨外子

故人不知

送のあはれとよみつるを

葉一蝶化之具階達節附一陸運ぶとんふ

情乳去方あそそ之そよとんふとんふ
くりの父あそそ危をあそいの運ぬむの細帯どく
あそそこをすたさすつるをすこよすた

り人の心のかげ陸運海

そり丹空のかあそすわとんふとんふ
胃いあそ踏つるふれぬ心とんふとんふ
とんふとんふとんふとんふとんふとんふ
とんふとんふとんふとんふとんふとんふ

そんぢやう志たりいふまゝに原まぢふみぢや
のる風こゝろ望むまの比くるまぢや

三言云ふまゝに京所大文字をぢぢぢぢぢ
りぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
かぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

寛政より又化すつたりて念一とあるまぢぢぢぢ
あり文化身身の頃身明えはぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
娘ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

三言曰一後がけ大文字のありどつぢぢぢ
大なるを伏字いふる此天の意を以て書け
ものせんとすの内

大文字の唱ふ

いふまゝ京所大文字のうほぢぢぢぢぢぢぢ
名いふ市原をアまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
さぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

天明申四方赤良狂方を申自せしん

大文字を市也と狂歌をよみ狂名
を加保字の元成と叫文化今尚存其
帝元宇有為の狂名を棟上高見佛在
至墨阿ト云其他郭申之雅人牧養
狂名

魁園梅見云近頃六条園ニ茶ト云狂歌
江何直月大思を文四能年有こ水あり
七流今もそつて言名之難人文字名

けりてこも人を不降ハるちらめち
そる由流の許を候也



